論　説

アッバース朝期のセクシュアリティと同性間性愛
――ジャーヒズ著『ジャーリヤとグラームの美点の書』の分析を通じて――

辻　大地

Ⅰ．はじめに

前近代において同性間性愛と異性間性愛が並列して存在する社会が珍しくなかったことは，古代ギリシアや前近代日本を例に出すまでもなく衆目の一致するところである(1)。中世イスラーム世界でも同様に，男性同士での性愛関係がごく一般的なセクシュアリティのあり方として存在していたことを窺わせる史料上の記述は少なくない。

ところが，実際にこうした前近代イスラーム世界での同性間性愛の実情を，当時のセクシュアリティの構造の中に位置付けて明らかにした研究は少ないように見受けられる。前近代のイスラーム世界のセクシュアリティ，とりわけ男性同士での性愛関係についてはバートンの小論［Burton 1886］に始まり，大きな関心が払われてきた。しかし従来の研究は，そうした同性間での性愛・恋愛関係を，近代以降の概念である「同性愛 homosexuality」と同義のものとして捉える傾向にあり，その評価についてもイスラームでハラーム（禁忌）であるという点を強調してきた。例えば『イスラーム百科事典 新版』においても，現在「同性愛 homosexuality」と訳される “liwāṭ” の項目について見てみると，様々な時代・地域のイスラーム圏に存在した多様な同性間性愛文化を一括して「イスラームの同性愛」として扱っている。そして，それをイスラーム法による禁止にもかか

わらず広範に広まった「堕落」であり「堪え難く卑猥な言葉によって」賞賛された「恥知らず」な行為であったと表す［Pellat et al. 1986］。すなわち従来の研究では，通時的・通地域的な「イスラームの同性愛」といった概念を想定した上で，男性間での性愛関係について，それがハラームであることとの整合を付けようとする形で説明するものが主流だったのである(2)。

一方で近年，上記のような中世イスラーム世界のセクシュアリティの捉え方は，同性間性愛に関する研究を通じて解消されてきてもいる。例えば，エル＝ルアイヘブは16世紀から西洋的な価値観の流入が始まる19世紀までのオスマン朝下アラブを扱い，能動性と受動性・情熱的愛の伝統と審美意識・法学的見解という三つの観点から，この時代・地域の同性間性愛が近代的「同性愛」とは異なるということを論証した［El-Rouayheb 2005a］。実際，男性間での性愛関係を，過度にハラームであることを意識して無理やり整合を付ける形で理解するのではなく，当時のセクシュアリティにおける一つのあり方として捉える傾向は一般的なものになりつつある(3)。

しかしながら，こうした本質主義的理解から構築主義的理解への移行とも言える研究の変遷を受けてなされた研究は，オスマン朝期以降を扱ったものを除くとそれほど多くは見られない(4)。例えば，アッバース朝に関しては，文学作品や年代記，法学書，医学書など様々な史料の中に男性間での性愛・恋愛関係に関する記述が断片的には現れており(5)，当時同性間性愛を前提としたセクシュアリティのあり方がある程度当然のものであったことは明らかにされている［清水2005: 66-89; Sharlet 2010］。しかし，まとまった記述を含む史料が少ないことを主因として，当時のセクシュアリティの構造の中で同性間性愛文化を捉えるといった歴史学的研究は少なく，そのためアッバース朝期のセクシュアリティの構造的なあり方や人々のセクシュアリティ観は未だ詳らかでない(6)。

そこで本稿では，アッバース朝期の著名な文人ジャーヒズ al-Jāḥiẓ（d. 254/868）による『ジャーリヤとグラームの美点の書 *Kitāb Mufākhara al-Jawārī wa al-Ghilmān*』（以下 *MJGh* と略記）を扱い，特に男

性間での性愛関係についての分析を通じて，当該社会におけるセクシュアリティのあり方と，それに対する人々の共通した認識・観念を見出すことを目的とする。この史料は次章で詳述するように，当時のセクシュアリティに纏わる事柄を主題としたものであり，同時代の史料として無二のものと言える。

こうした視点からの，アッバース朝期のセクシュアリティについての考察，特に当時ごく一般的なあり方として存在していた男性間の性愛関係をいわば構築主義的に捉えることは，アッバース朝社会の一端を理解することであると同時に，この時代のセクシュアリティが近代以降のセクシュアリティとは違った観念の下で成立していたことを示すものである。これは，構築主義的な研究の言う，前近代的同性間性愛と近代的「同性愛」との「分断」を確認する試みとも言えよう。

Ⅱ．ジャーヒズの著作と『ジャーリヤとグラームの美点の書』

ジャーヒズはアッバース朝期の著名な文人であり，彼の著作を用いた様々な研究がなされてきた。その大半はジャーヒズ自身を対象として，彼をアラビア語散文の祖として評価する文学研究である。特に，ジャーヒズの著作とシュウービーヤ運動との関連を強調するものが目立つ［Pellat 1969］が，最近では濱田聖子の『けちんぼども *al-Bukhalāʾ*』を扱った一連の研究［濱田2006］のように，あえてシュウービーヤ運動とは異なる視点からジャーヒズの著作を解釈する研究もある。

一方で，ジャーヒズの著作は歴史研究における史料としても用いられてきた。例えば佐藤次高はジャーヒズの『トルコ人の美徳 *Manāqib al-Turk*』を紹介しつつ，アッバース朝のトルコ人マムルークの導入当時の様子について記している［佐藤1991］。また，本稿で用いる *MJGh* を使ったものとしては，グラームのアッバース朝社会での位置付けを論じる中で，グラームが「イエ」において時には主人の愛と性の対象でもあったことを示した清水和裕の研究［清

水2005: 66-89］や，*MJGh* に登場する去勢者の記述に着目し，アッバース朝期の「ハーディム」という語が去勢者の意味で用いられていたと主張したアヤロンの論考［Ayalon 1985］がある。

本稿ではこうした歴史研究に倣いつつも，史料を通読した上でその内容を文脈に即して言説的に分析するという方法をとる。こうした手法は従来の *MJGh* を用いた歴史研究ではあまり用いられておらず，むしろ文学研究で多く行われてきた。*MJGh* は史料の乏しい当時代において，セクシュアリティについて広く記したほぼ唯一の作品と言え，この史料を言説的に分析することによって，史料の不足という従来の問題点の一端が補われる。また当該書は「森羅万象に亘る知識への関心」と「真面目と冗談」の技法(7)という，ジャーヒズのムナーザラ munāẓara 作品(8)に通底する特徴を踏襲した作品である［岡﨑2009］。すなわち，*MJGh* は性的な話題であっても隠すことなく様々な知識を網羅的に読者に提示することを目的としており(9)，その点においても本稿で扱う史料として適したものであると言える。

MJGh で中心となるのは，ジャーリヤ支持者対グラーム支持者の議論と，その後に付される逸話群である。まずジャーリヤ支持者とグラーム支持者とが互いに，性的対象としてジャーリヤとグラームとではどちらが優れているかについて，交互に 8 回のやり取りを行う(10)。この議論では，ジャーリヤとグラームにとどまらず，去勢者や老人の性に纏わる事柄にまで話題が及ぶ。また両者の発言はほとんどがクルアーンやハディース，逸話，詩の引用によって構成される。そして，この議論が終わると読者をより楽しませるためにとの理由から［*MJGh*: 125］，様々なセクシュアリティに纏わる逸話が雑多に28個並べられる。

MJGh の展開における特徴として，登場人物を幾つかの人物類型に分けて，各々の行動を提示するという点がある。このような人物類型を主題とした作品はジャーヒズの得意としたところであり，上で挙げた『けちんぼども』や『トルコ人の美徳』もそれぞれ，吝嗇漢・トルコ人という人物類型に着目したものである。*MJGh* で登場

する人物はほとんどが個人名ではなく「グラーム」や「ある男」「ある去勢者」などと，その類型を代表する人物として描かれる。また，逸話の中で個人名が示される場合でも，自明な者以外はその人物がどのような類型に当たる者なのかが示される。

ここで先に *MJGh* に登場する主な人物類型を挙げておきたい。まず重要なものとして，この作品のタイトルにもなっている「ジャーリヤ jāriya（jawārī）」と「グラーム ghulām（ghilmān）」がある。そして，その両者をそれぞれ性的な嗜好とする「姦通者 zinā'（zanā）」と「ルーティー lūṭī（lāṭa）」，すなわち「ジャーリヤ支持者」と「グラーム支持者」も *MJGh* において重要と言える(11)。この他に現れる人物類型としては「去勢者 khaṣī（khiṣyān），khādim（khuddām）」「老女 'ajūz（'ajā'iz）」「ムハンナス mukhannath」といったものがある。

次章ではまず，ジャーヒズの用いた人物類型のうち「ジャーリヤ」「グラーム」「去勢者」という類型を中心に，姦通者・ルーティーを含む「成人男性」という類型にも着目して，各々の類型がセクシュアリティの中でどのように捉えられていたのか考察したい。

Ⅲ．*MJGh* における人物類型とその区分

1．ジャーリヤ

まずは *MJGh* での主な議論の対象となっているジャーリヤについて，作品中でどのように描かれているのかを見てみたい。この際，*MJGh* におけるジャーリヤという語は，多様な表現に言い換えられ得ることに留意する必要がある。例えば，「女性 unthā と性交すること」と「ジャーリヤと性交すること」が同一のものとして書かれている事例［*MJGh*: 112］や「クライシュ族の高貴な女性 imra'a」を指して「ジャーリヤ」と表記する事例［*MJGh*: 132］がある。また一つの逸話中で，「ジャーリヤ」が「女奴隷」や「姦通女」と表記される以下のような事例もある。

> イラク総督が歌手の女奴隷 qayna を大金で購入した。〔…〕彼〔イラク総督〕は「おいグラームよ。この姦通女 zāniya の手を

取り，彼女を物語師のアブー・アル＝ハズラ Abū al-Ḥazra に引き渡してしまえ」と言った。〔…〕彼〔イラク総督〕は「あなた〔アブー・アル＝ハズラ〕は，［私が送った］そのジャーリヤをどのように思うか？」と尋ねた［*MJGh*: 128］

当時ジャーリヤという語は女奴隷の意味で用いられることが多いが(12)，上記のような事例を見ると *MJGh* での「ジャーリヤ」はより広く，身体的な性が「女性」である者全般を指していることがわかる(13)。

ここで興味深い点として，身体的な性が女性でありながら，ジャーリヤと呼ばれない人物の類型は，一般的な性別を表す以外の意味を持たない「女性」という語(14)を除くと，「老女 ʻajūz（ʻajāʼiz）」という類型のみであった。老女が登場する事例は，いずれも美しかった若かりし頃を回想する老女を描いた二つの逸話であり［*MJGh*: 122-123, 135］，特に一つはジャーリヤでない女性の一事例という文脈で老女が取り上げられる。

それでは，*MJGh* におけるジャーリヤはどのような者として評価されるのだろうか。まず，多く描かれる記述はジャーリヤの外見に関する美点についてである。具体的には顔の美しさ［*MJGh*: 127, 132］や尻の肉付きがよいこと［*MJGh*: 120, 122］，しなやかな体つき［*MJGh*: 96, 101, 121］などが言及される。また年齢の若さが美点とされる箇所も多い［*MJGh*: 96, 103, 122, 132］。さらに注目すべき点として，「グラームらしさ」がジャーリヤの美点として挙げられている［*MJGh*: 95, 96, 97］一方で，ジャーリヤが「男らしいこと」は欠点としてみなされていた［*MJGh*: 101, 131］。外見的な特徴以外では，身体的な性と直接関係する美点が挙げられる。例えば，女性器(15)のよさについての記述［*MJGh*: 120, 135］や，性交が出産に結びつく点を美点とする記述［*MJGh*: 103］があった。

2．グラーム

ジャーリヤと対する者としてグラームがある。グラームについても上記のジャーリヤに関する場合と同様に，「若者」や「奴隷」な

ど多様な表現に言い換えられ得る(16)。しかし，ジャーリヤの場合とは異なり，身体的性が男性である者の中でも一般的に成人男性としてみなされない者のみがグラームと言い換えられる点は注目すべきであろう。

MJGh で成人男性は，基本的には単に「男 rajul（rijāl）」として表される。また，姦通者やルーティーという語も，一般的に成人男性に対して用いられる語である。*MJGh* 中でも「ルーティーの男 rajul」などの表現があり［*MJGh*: 125，126］，これらの語が成人男性に対して用いられていることは明らかである。しかし実際，成人男性と成人男性とみなされない者との区分は曖昧でもある。例えば「若男 fatā'」という語はグラームに対して用いられることもあれば［*MJGh*: 110］，成人男性の区分に当てはまる者に用いられる場面もある［*MJGh*: 130］。一方で同じく，若い男性の意味を示しつつも，より年齢層が下の者に用いられる「若者 ṣibā'（ṣibyān）」「髭のない若者 amrad（murd）」という語に関しては，グラームに当てはまる場面でしか用いられることはない。これらから，正確な区分は元より難しくあるが，髭が生える時期を一定の指標とした年齢が，成人男性と非成人男性とを区分する一要素であったと推察できる。

グラームの外見的な美点は，ジャーリヤと非常に類似している。グラームについても，顔の美しさ［*MJGh*: 110，111］，尻の肉付きのよさ［*MJGh*: 106］，しなやかな体つき［*MJGh*: 106］について，ジャーリヤに対してなされたのと似た表現で評価される。また，若さが美点として扱われる点も共通する［*MJGh*: 96，114，125］。グラームにのみ言及される外見的な美点としては，髭がないことがあった［*MJGh*: 98，111］。これは「グラームについては，彼らの美しさとその両頬の純粋さが保たれるのは，大抵10年間ほどである。髭が生え，髭のない若者 amrad の段階を過ぎるまでなのだ」［*MJGh*: 122］という記述からもわかるように，グラームの若さを示す美点と理解できるが，ジャーリヤとの類似を示す美点と考えることもできる。

一方，グラームの美点の中で，身体的性と直接関わる特徴についてはジャーリヤの場合と評価が分かれた。その最たるものが，月経

や出産の話題である。グラーム支持者は，グラームは月経や子を孕むという面倒ごとがないため性的対象としてジャーリヤに勝っていると主張する［*MJGh*: 104, 113］。これは，ジャーリヤ支持者が出産を好意的に捉えていたのとは異なる。またジャーリヤには女性器のよさについての言及があったのに対し，グラームの男性器のよさについての言及はない。ジャーリヤにおける女性器のよさと対応するものとして，グラームにおいて挙げられるのは肛門 faqḥa, ist のよさであった［*MJGh*: 120, 136］。ジャーリヤの女性器とグラームの肛門との対応関係は以下の，男性器が女性器との性交ではなく，肛門との性交に適した形になっているというルーティーの主張からも明らかである。

> ［ルーティーが言うには，］男性器 ayr の本質は肛門 faqḥa［での性交］のためにある。［この証拠として］円のために円になっているのである(17)。もしも，それ〔男性器〕が女性器 ḥirr［での性交］のためにあるならば，戦斧 ṭabarzīn の形になっていなければならない［*MJGh*: 126］

上記のことからは，ジャーリヤとグラームが同次元で捉えられ，比較されていたということが言える。外見の面でグラームの美点とジャーリヤの美点とが類似していることは，評価の対象となる美点が一致していることを示す。その一方で，両者の身体的性に基づく特徴においては，出産・月経が好意的に捉えられるか否定的に捉えられるかという相違，そして，ジャーリヤにおいて美点とされる女性器と対応するものが，グラームの場合は男性器ではなく肛門であるという相違があった。しかし，これらの相違は両者とも，妊娠・性交における受動性という特徴において共通しているとみなすことができる。これは，成人男性の美点についての記述と比較するとより顕著である。

MJGh 中で成人男性の美点が，ジャーリヤ・グラームの美点と共通するのは，顔の美しさ［*MJGh*: 133］と年齢の若さ［*MJGh*: 98, 99］のみである。それ以外の美点は全て成人男性に特有のもので，高貴なこと［*MJGh*: 132-133］や裕福なこと［*MJGh*: 98, 99, 132-133］，

髭があること［*MJGh*: 127］，男性器が大きいこと［*MJGh*: 133-134］などであった。特に髭があるという美点に関しては，髭がないことが美点であったグラームや髭がないことが当然であったジャーリヤとは相対する評価である。また，高貴なこと・裕福なこと・男性器が大きいことという美点は全て，女性が婚姻や性交の相手を評価する文脈の中で現れている点も興味深い。

以上のようにジャーリヤやグラームの美点と成人男性の美点とでは，そもそもの評価基準が大きく異なっていた。その相違とは，女性器や肛門のよさと男性器のよさとの違い，あるいは，出産させられる（できない）側と出産させる側との違い，といったように身体的性に関する特徴に特に表れている。これらはすなわち，性交や婚姻における受動の側に対してなされる評価基準と能動の側に対してなされる評価基準との違いと言えよう。ここからは，ジャーリヤやグラームという両者ともに「成人男性ではない」という意味においての「非・成人男性」と，「成人男性」との緩やかな二項対立的区分に基づいた理解が可能である。加えて言うと，上で述べたように「グラームらしさ」がジャーリヤの美点であった一方で，「男らしいこと」が欠点であるという評価は，ジャーリヤとグラームとの類似性を表す一方でジャーリヤと成人男性との相反性を表しており，「非・成人男性」として捉えられる人物類型と成人男性として捉えられる人物類型の区分を窺わせる。

3．去勢者

以上の「非・成人男性」／成人男性という区分を踏まえると，他の類型の人物はどちらの区分として捉えられていたのだろうか。本節では，ジャーリヤでもグラームでもない類型である去勢者(18)を取り上げて検討してみたい。*MJGh* には「ハスィー khaṣī（khiṣyān）」や「ハーディム khādim（khuddām）」と表される，去勢者という人物類型が存在する(19)。「ハスィーは男性器 ‘uḍw を切られる」［*MJGh*: 124］者だという記述や，ハーディムが女奴隷の管理という去勢者に特有の職務を命じられている［*MJGh*: 128］点から，

MJGh でも基本的にこれらの語は去勢者（宦官）を指すと考えられる。

まず，*MJGh* において去勢者がどのような者として捉えられているのかが明確に現れている記述として，ハスィーとは「①男 rajul ではないが，女 imra'a でもない者である。その〔ハスィーの〕性質とは，②女性 nisā' の性質と若者 ṣibyān の性質との間にあるのだ」［*MJGh*: 123］という一文がある。この文は，二つのことを意味する。まず，点線部①については，ハスィーは去勢されており，男性器がないという意味で身体的な性別としては男性でも女性でもないと捉えられていたと理解できる。ここで注意しておきたいのが，身体的な性別としての男性・女性を示す rajul と imra'a という語を使っている点である。すなわちここでの「男でも女でもない」というのは身体的な性差としての男女を指しているということ，さらには，去勢者が成人男性 rajul でないとされていることもわかる。次に，点線部②の記述では，去勢者が女性 nisā' や若者 ṣibyān の性質を併せ持った者として扱われており，成人男性よりもジャーリヤやグラームに近い者として捉えられていることが窺える。上で述べたように，「若者 ṣibyān」という語は成人男性を指す際には用いられず，グラームを指す際に用いられる語であった。同じく去勢者が nisā' と ṣibyān の性質を併せ持った者だという評価は「ハスィーはすぐに悲しみや怒りを感じる。それは nisā' や ṣibyān の特徴でもある」［*MJGh*: 124］との記述からも確認でき，やはり去勢者が成人男性ではなく「非・成人男性」の区分に当てはまるものとして認識されていたことがわかる。

また，去勢者が成人男性よりもジャーリヤやグラームに近い者として捉えられていることは，去勢者の美点についての記述からもわかる。*MJGh* での去勢者の美点についての記述はジャーリヤやグラームの美点とほぼ共通しており，顔が美しいこと［*MJGh*: 123］やしなやかな体つき［*MJGh*: 105, 123］などがジャーリヤやグラームへの評価と同様の表現で記されている。また，グラームと同様に髭がないことが美点として捉えられていることからは，髭があることが

美点であった成人男性よりも，ジャーリヤやグラームと近い者としてみなされていたことが窺える。

以上のように *MJGh* での去勢者についての記述からは，少なくともセクシュアリティの場では，去勢者は明確にジャーリヤやグラームといった「非・成人男性」の区分に当てはまる者であるとみなされていた。

Ⅳ．*MJGh* での人物類型の区分とセクシュアリティにおける役割

本章では，前章で示したジャーリヤ・グラーム・去勢者といった「非・成人男性」と成人男性との区分が，それぞれセクシュアリティにおいてどのような役割を持っていたのかについて考えてみたい。その際，*MJGh* での人物類型の中から，特にルーティーとムハンナスという対をなす二つの類型に着目した分析を行う。

１．性行為における能動性と受動性：ルーティーとムハンナス

前述のように，*MJGh* にはルーティーとムハンナスという人物類型が登場する。一般的にルーティーとは同性間性愛・恋愛関係において能動の側の成人男性を指すのに用いられる語である［Pellat et al. 1986; El-Rouayheb 2005a: 16］。すなわち，男性との性交における「挿入する側」がルーティーと呼ばれ，先に述べたように *MJGh* ではグラーム支持者とほぼ同義と言える。一方，ムハンナスはそれと対をなす語である。字義通りには「女々しい」「柔弱な」という意味で，女装して歌手や楽器演奏家などを勤める職業階層を指すこともあったが，セクシュアリティの文脈においては同性間性愛における受動の側の成人男性に対して用いられる［Pellat et al. 1986; El-Rouayheb 2005a: 16; 堀内2013］。もちろん，同性間性愛がハラームであるイスラーム(20)においては，両者とも処罰の対象となり得る存在である。

MJGh においてルーティーという存在は，ジャーリヤ支持者によるグラーム支持者非難の中で，クルアーンやハディースによって否

定された者として言及されることが多い。例えばジャーリヤ支持者は，クルアーンの記述をはじめアリーやアブー・バクル，ヒシャーム Hishām[21]など高名な人物がルーティーに否定的であったという逸話を持ち出して，ルーティーは罰せられるべきだと述べる［*MJGh*: 100］。こうしたジャーリヤ支持者の主張に対して，グラーム支持者たちも「あなた〔ジャーリヤ支持者〕の我々〔グラーム支持者〕に対する，クルアーンや諸伝承や法学者たちに拠った議論については，我々もあなたが読んだものと同じものを読み，あなたが聞いたものと同じものを聞いた」［*MJGh*: 116］と述べ，ルーティーが法的には非難されるべき者であるということについて同意している。しかしこの後にグラーム支持者は，それでもなお現世での楽しみを追求するのならば，グラーム愛好はジャーリヤ愛好に勝ると主張する［*MJGh*: 119］。

一方ムハンナスは， *MJGh* においては性的な欲望のために男性性を捨てて女性に近い性質になった者として認識されている。例えば *MJGh* の逸話の一つに，女性がムハンナスに対して非難の意を込めて「あなた〔ムハンナス〕は，その〔性交の〕願望のために男性 rijāl としての性質から女性 nisā’ としての性質へと移り，ついにはあなたの髭を剃りさえした」［*MJGh*: 127］と言うものがある。この記述からは，ムハンナスは性的な快楽のために女性的な性質になることを求めた者だと認識されており，またそのことが否定的に捉えられていることがわかる。

また，上の記述では髭の喪失が男性性から女性性への変移を示していると認識されていることが窺える。別の逸話では「［イスハーク・マウスィリー Isḥāq al-Mawṣilī[22]が］若くてとても顔の美しいムハンナスを目にした時，彼〔ムハンナス〕は髭を剃っており，そのことは彼の顔を醜くしていた」［*MJGh*: 127］とある。その後，イスハークはそのムハンナスに対して，髭こそが男を美しくするのに，なぜあなたは髭を剃っているのかと問いかけるも，ムハンナスはこれに反論し髭を生やそうとしない。この逸話からは，上で確認したように成人男性は一般的に髭を生やしていることが美点であるというこ

とが確認できる一方で，ムハンナスは髭を生やすことを美点と考えていないということがわかる。さらに，「グラームとは時に，かつては髭に覆われていたのにもかかわらず，男性たち rijāl の欲望を掻き立てるために自らの髭を抜きさえする，恥知らずな者」である［*MJGh*: 122］というジャーリヤ支持者からの非難も併せて考えると，ムハンナスは周囲からは成人男性としてみなされていながら，本人の意思により成人男性と見られてることを拒む者として捉えられており，またそのことが「恥知らず」なこととして認識されていたということが理解できる。

ここで確認しておきたいのが，先に挙げたグラームの美点の一つが，髭が生えていないことであったということである。男性に髭が生えることとはグラームから成人男性になるということであり，これは「非・成人男性」の区分から「成人男性」の区分へと捉え直されるということを示していると考えられる。すなわち，髭は成人男性であることの証であり，逆に髭がないということが「非・成人男性」の視覚的な印であったのである。そこでムハンナスは性的な対象として見られるためにこそ，「非・成人男性」に共通する髭がないという美点を求めたのであり，これは成人男性が性交における能動の側であったのに対して「非・成人男性」が受動の側にあったということを示すものであると言えよう。

2．人物類型に基づく区分とセクシュアリティにおける役割

MJGh での性行為の描写について見ると，性行為の際の能動・受動の役割が明確に決まっていたことが窺える記述が多くある。この役割分担は，守られない場合には罰則を受けることもあるほどに強固なものとして認識されていた。例えば以下の事例がある。

> メディナに「緑のサッラーマ Sallāma al-Khaḍrā’」と呼ばれる(23)恥知らずの女 imra’a がいた。彼女はムハンナスとともに捕まった。彼を張型 kīrinj で犯していた tanīku-hu のである。そこで彼女は総督のところに連れていかれた。彼〔総督〕は彼女を叩いて痛みを与え，また彼女をラクダに乗せて引き回しの

刑に処した。彼女を知っているある男 rajul が彼女を見かけて，「ああ，サッラーマよ。これは何としたことだ？」と尋ねた。そこで彼女は答えた。「神にかけて，黙りなさい。この世で最も不当なものは男性である。あなたたちは皆，いつだって我々〔女性〕を犯す。もし万一，我々〔女性〕があなたたち〔男性〕を犯すということになった時には，あなたたちは我々を殺すことだろう」［*MJGh*: 135］

この逸話では，サッラーマが能動の側としてムハンナスを犯す形での性交をしており，そのために両者ともが捕らえられている。またその後のサッラーマの発言を見ると，彼女は男性に対し敵意を見せ，成人男性である知り合いの男 rajul に対して，女性がいつも性交の際に受動の側であり，さらに能動と受動が逆転した際には，男性は女性を殺しさえすると不満を言う。これらのことから，セクシュアリティにおいては男性が能動の側に立ち，女性には受動性が求められることが一般的であったということが窺える。

また，去勢者やムハンナスについても，セクシュアリティにおいて役割が定まっていたことを示す記述がある。例えば，去勢者については次の逸話がある。

ある君主が去勢者を伴って妻の元に行くと，彼女は彼〔去勢者〕から身を隠した。君主が妻に「彼は女性 mar'a の場所にいる［ことが可能な］者なのにお前は彼から隠れるのか」と言うと，彼女は次のように応じた。「それ〔去勢〕によって，アッラーが禁じていること（近親者以外の男性がむやみに女性の前に姿を現すこと）が彼には許されるようになるとお考えか？」［*MJGh*: 125］

この伝承からは，男性の側から見た去勢者は性的に受動か，少なくとも能動ではない者とみなされており，そのために自らの妻と会っても構わない存在だと考えられていたことがわかる。

また，去勢者に関しては以下の記述もある。

彼〔去勢者〕が得るものは，悲しみや後悔である。女性に恋焦がれつつも婚姻を逃した時，彼らは互いに（去勢者同士の内で）

憎しみあっている者たちよりも，去勢されていない男性たち fuḥūl に強い憎しみを向ける［*MJGh*: 124］

この記述からは去勢者が，婚姻（能動の立場からの性交）の不能のために，成人男性とは異なる者，さらには相対する者としてさえ認識されていることがわかる。

ムハンナスについても，ジャーリヤ支持者が有名なハディースを引用している。この中でムハンマドは，彼の妻であるウンム・サラマ Umm Salama（d. 11/632）とムハンナスとが会話することを許しているが，その会話中でムハンナスが女性の体の特徴を詳しく話しているのを聞くと，ムハンマドは「お前が女性の体について知っているとは思わなかった」と言ってそのムハンナスをマディーナから追放する［*MJGh*: 101-102］。このハディースはムハンマドがムハンナスを，性的に受動であるので女性に手を出すことはないと考えたために妻に近づくことを許していたということを示すものであると考えられる。実際，ムハンナスが女性の体について詳しい風であることを知ると，彼は街から追放される。これらのことから去勢者もムハンナスも，ともにセクシュアリティにおいて受動の側にあたるものと認識されており，そのため成人男性として捉えられていなかったと理解できる。

以上より，セクシュアリティにおいては能動と受動の役割が重要視されており，能動の側の役割は成人男性が，受動の側の役割は「非・成人男性」とみなされる者がそれぞれ担うということが当然の前提として認識されていたということが窺えよう。

Ⅴ．おわりに

以上，本稿では *MJGh* の検討を通じて，アッバース朝期のセクシュアリティの場において人々が共通して持っていたと思われる意識について見てきた。当時のセクシュアリティの場で重要な点の一つとして，女性やグラーム，そして去勢者やムハンナスといった人物類型と，それに対して成人男性という人物類型との区別が見られた。これは成人男性と「非・成人男性」という区分で捉えられる。

また，こうした成人男性と「非・成人男性」との区分はそのまま，セクシュアリティにおける能動と受動の関係となっていた。少なくとも *MJGh* 中のセクシュアリティの場において，この役割分担は入れ替わることはなく，当然の前提であったように見受けられる。先に見たように，「非・成人男性」である女性が性交の際に能動の側に立つといった役割分担の「逸脱」が起こった時には，その女性は罰せられるほど，この役割分担は明確で厳重なものだったのである。

MJGh におけるセクシュアリティの場で重要なのは能動と受動との明確な役割の分担であり，それを各々担う区分の存在であったと言えよう。そしてその区分とは，男／女という身体的な性に基づく区分ではなく，成人男性／「非・成人男性」という区分であった。しかし，この区分は身体的な成長によって「非・成人男性」としての捉えられ方から成人男性としての捉えられ方に移行するグラームの存在や，成人男性ではなく「非・成人男性」として捉えられることを意図的に試みるムハンナスの存在によって，一種の揺らぎを含むものでもあった。

ハラームであることは理解されていたにもかかわらず，同性間性愛文化が成り立ち得た理由として，こうした成人男性／「非・成人男性」の区分というセクシュアリティに対する観念の存在がその一つにあったことは間違いないだろう。こうした観念を無視し，二元的な身体的性のあり方を前提とした「同性愛」という概念を用いてこの文化を理解することは無意味である。むしろ今後，成人男性／「非・成人男性」という区分に基づく同性間性愛文化の社会文化的意味・位置づけを理解するにあたって重要なのは，前近代における他社会が持つセクシュアリティの構造との比較分析であろう。例えば，古代ギリシアや前近代日本に見られる，同性間性愛を当然のものとして含みこんだセクシュアリティの構造との比較分析は，多くの共通点・相違点(24)を通じて，本稿で得られたセクシュアリティの場における基礎的な構造を相対化し，アッバース朝社会に位置づけるために有効な手段だと言える。

また本稿ではジャーヒズの著作に対する言説的な分析から当時のセクシュアリティの観念を探ることを試みたが，ここで得られた結論はあくまで *MJGh* の記述のみに着目したものである。そこで目下の課題としては，アッバース朝期の史料に見られる種々の断片的な記述が，本稿で示した図式に則っていることを確認しなければならない。例えばジャーヒズは他の著作において，男性間での性愛に対して法学的・倫理的な見解に則った否定的な見解を示してもいる［*Tafḍīl*: 164; *Muʻallimīna*: 43］。こうした同一著者による著作の中での意見の揺れは，著作の性質の違いによって宗教的・法的大義名分と現実の生活との間での相違を表していると考えられる。そこで今後は，本稿で得られた基礎的な構造が，他の史料上の記述にも当てはまり得るものなのか検証していきたい。

参考文献

史料

Qānūn: Ibn Sīnā（d. 429/1037）, *al-Qānūn fī al-Ṭibb*, 3 vols., Bayrūt: Dār al-Ṣādir, n.d.

Baghdād: Ibn Ṭayfūr（d. 280/893）, *Kitāb Baghdād*, H. Keller（ed.）, Bayrūt: Dār al-Janān, 1908.

Kuttāb: al-Jāḥiẓ（d. 254/868）, “Kitāb Dhamma Akhlāq al-Kuttāb”, *Rasāʼil al-Jāḥiẓ*, vol.2, M. Hārūn（ed.）, Bayrūt: Dār al-Jīl, 1991, 183-209.

Muʻallimīna: al-Jāḥiẓ, “Kitāb fī al-Muʻallimīna”, *Rasāʼil al-Jāḥiẓ*, vol.3, M. Hārūn（ed.）, Bayrūt: Dār al-Jīl, 1991, 25-51.

MJGh: al-Jāḥiẓ, “Kitāb Mufākhara al-Jawārī wa al-Ghilmān”, *Rasāʼil al-Jāḥiẓ*, vol.2, M. Hārūn（ed.）, Bayrūt: Dār al-Jīl, 1991, 87-137.

Tafḍīl: al-Jāḥiẓ, “Kitāb fī Tafḍīl al-Baṭn ʻalā al-Ẓahr”, *Rasāʼil al-Jāḥiẓ*, vol.4, M. Hārūn（ed.）, Bayrūt: Dār al-Jīl, 1991, 153-166.

Murūj: al-Masʻūdī（d. ca.345/956）, *Murūj al-Dhahab wa Maʻādin al-Jawhar*, 7 vols., C. Pellat（ed.）, Qum: Intishārāt al-Sharīf al-Raḍī, 2001（1965）.

Diyārāt: al-Shābushtī（d. 388/998）, *Kitāb al-Diyārāt*, K. ʻAwwād（ed.）, Baghdād: Maktaba al-Maʻārif, 1966.

研究文献

Andrews, W. G. and M. Kalpaklı, 2005. *The Age of Beloveds: Love and the Beloved in Early-Modern Ottoman and European Culture and Society*, Durham: Duke University Press.

Ayalon, D., 1985. “On the Term *Khādim* in the Sense of ‘Eunuch’ in the Early Muslim Sources”, *Arabica*, 32, 289-308.

Burton, R. F., 1886. “Terminal Essay”, *The Book of the Thousand Nights and a Night: with Introduction Explanatory Notes on the Manners and Customs of Moslem Men and a Terminal Essay upon the History of the Nights*, vol.10, London: The Burton Club, 63-302.

Dunne, B., 1997. “Re-Orienting Ourselves”, *Lambda Book Report*, 6(2), 20-21. (review of *Islamic Homosexualities: Culture, History, and Literature*)

El-Rouayheb, K., 2005a. *Before Homosexuality in the Arab-Islamic World, 1500-1800*, Chicago: The University of Chicago Press.

El-Rouayheb, K., 2005b. “The Love of Boys in Arabic Poetry of the Early Ottoman Period, 1500-1800”, *Middle Eastern Literatures*, 8(1), 3-22.

Murray, S. O. and W. Roscoe, 1997. *Islamic Homosexualities: Culture, History, and Literature*, New York: New York University Press.

Pellat, C., 1969. *The Life and Works of Jāḥiẓ*, D. M. Hawke (trans.), Berkeley: University of California Press.

Pellat, C., et al., 1986. “Liwāṭ”, *The Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., vol.5, Leiden: E. J. Brill, 776-779.

Rosenthal, F., 1997. “Male and Female: Described and Compared”, *Homoeroticism in Classical Arabic Literature*, J. W. Wright Jr. and E. K. Rowson (eds.), New York: Columbia University Press, 24-54.

Sharlet, J., 2010. “Public Displays of Affection: Male Homoerotic Desire and Sociability in Medieval Arabic Literature”, *Islam and Homosexuality*, vol.1, California: Santa Barbara, 37-55.

Shuraydi, H., 2014. *The Raven and the Falcon: Youth versus Old Age in Medieval Arabic Literature*, Leiden: Brill.

Szombathy, Z., 2013. *Mujūn; Libertinism in Mediaeval Muslim Society and Liter-*

ature, Cambridge: Gibb Memorial Trust.

Wright, J. W., Jr., 1997. “Masculine Allusion and the Structure of Satire in Early ‘Abbāsid Poetry”, *Homoeroticism in Classical Arabic Literature*, J. W. Wright Jr. and E. K. Rowson（eds.）, New York: Columbia University Press, 1-23.

Ze’evi, D., 2006. *Producing Desire: Changing Sexual Discourse in the Ottoman Middle East, 1500-1900*, Berkeley: University of California Press.

井谷鋼造1994.「中世イランの愛と性」追手門学院大学東洋文化研究会編『エロスの文化史』勁草書房, 232-250.

氏家幹人1995.『武士道とエロス』講談社.

岡﨑桂二2009.「アラブ文学における論争ジャンル：「マカーマート」の周縁」『四天王寺大学紀要』48, 299-330.

岡﨑桂二2010.「アダブ考：アラブ文化におけるアンソロジーの思想」『四天王寺大学紀要』51, 1-27.

カイ・カーウース（黒柳恒男訳）1969.「カーブースの書」『ペルシア逸話集』平凡社，3-192.

佐藤次高1991.『マムルーク：異教の世界からきたイスラムの支配者たち』東京大学出版会.

清水和裕2005.『軍事奴隷・官僚・民衆：アッバース朝解体期のイラク社会』山川出版社.

ドーヴァー，ケネス・Ｊ.（中務哲郎・下田立行訳）1984.『古代ギリシアの同性愛』リブロポート.

波戸愛美2007.「14-15世紀アラブ中東社会における奴隷の用語法」『アジア地域文化研究』4, 105-124.

濱田聖子2006.「けちん坊たちの策略：ジャーヒズ著『けちんぼども』に即して」『比較文学研究』87, 41-78.

林佳世子2008.『オスマン帝国500年の平和』（興亡の世界史10）講談社.

堀内勝2013.「イスラーム初期歌謡文化について」『貿易風：中部大学国際関係学部論集』8, 159-222.

堀内勝2015.『ラクダの跡：アラブ基層文化を求めて』第三書館.

前嶋信次訳1979.「美男と美女との優越についてある女流学者が論争した話」『アラビアン・ナイト』10, 平凡社, 156-173.

リューブ，ゲイリー・P．（藤田真利子訳）2014.『男色の日本史：なぜ世界有数の同性愛文化が栄えたのか』作品社.

註

（1） 日本のものに関しては［氏家1995; リューブ2014］などを，古代ギリシアのものに関しては［ドーヴァー1984］などを参照。

（2） こうした研究の代表例としては［Wright 1997］や［Rosenthal 1997］が挙げられる。これらは，前者は詩に，後者は論争文学作品にそれぞれ着目して，その中の「同性愛」に関する表現が単なる文学的修辞表現や社会に対する風刺・冗談に過ぎず，当時の同性間性愛の存在を示すものではないと主張する。しかしこれらの研究は，ハラームであるはずの同性間性愛が文学作品に現れるという「矛盾」を無理に整合を付けようとしたものであり，林の言う「苦しい説明」（註（3）参照）の一例と捉えることができる。またエル＝ルアイヘブも，このローゼンタールの見解を否定的に捉え，文学作品や詩を歴史史料として使用することの有効性を唱えている［El-Rouayheb 2005a: 76］。

（3） 例えば，近年の概説書にも「恋人への愛を謳う際，その恋人のほとんどが男性である点もオスマン詩に共通する特徴である。〔…〕少年の美や彼らへの愛を謳った詩を『神への愛のレトリック』だという苦しい説明は，徐々に時代遅れのものになりつつある」［林2008: 265］といった記述がある。

（4） こうした研究史上の変遷を受けた，男性間の性愛関係を扱う歴史学的研究は，エル＝ルアイヘブによるもの以外にも［Andrews and Kalpaklı 2005］や［Ze’evi 2006］など，オスマン朝期以降の時代を扱う研究において，近年増加している。この理由としてはしばしば指摘されるようにオスマン朝期以降は比較的多くの史料に恵まれていることがあるだろう［El-Rouayheb 2005b: 3-4; 林2008: 265］。一方，オスマン朝期よりも前の時代を扱うものにおいて，こうした研究はまだ少なく，その少数のものについても歴史学的研究としては不満の残るものが多い。そうした研究の代表的な例としては［Murray and Roscoe 1997］が挙げられよう。これはオスマン朝期以前も含めた多様な地域・時代を扱った，文学研究・歴

史学的研究・文化人類学的研究からなる論集であり，クルアーンの分析を通じてイスラーム世界の「同性愛」への寛容さを主張するなど画期的な見解も含む。しかし，同性間での性愛関係を過度に理想化した記述が見られるという指摘や，アラブ世界を専門とする歴史学者が参加していないために二次文献や翻訳史料に拠っており，不確かな事実認識が散見するという指摘もある［Dunne 1997］。

（5） アッバース朝期イスラーム世界における男性間での性愛についての記述としては，まず『千夜一夜物語』中の数編やアブー・ヌワース Abū Nuwās（d. ca. 198/813）をはじめとした詩人たちによる少年愛詩といった，文学作品中の記述が思い浮かぶ。しかしそれだけでなく，年代記史料中にもカリフ，アミーン al-Amīn（d. 198/813）のグラーミーヤ（グラームの格好をさせた女性）愛好［*Murūj* 5: 213-214］や，大法官ヤフヤー・ブン・アクサム Yaḥyā b. Aktham（d. 242/857）のグラーム愛好［*Kuttāb*: 208-209; *Murūj* 4: 318; *Baghdād*: 168-169］などの事例が伝えられている。また，ズィヤール朝君主カイ・カーウース Kay Kā'ūs（d. 617/1220）が息子に当てた『カーブースの書 *Qābūs Nāme*』のような君主鑑にも，性の楽しみ方に対する教訓として「女と若者（グラーム）のいずれの性に片寄ってもならぬ。〔…〕夏には若者，冬には女をかわいがれ」［カーウース1969: 62-63］と書かれるように，同性間での性愛関係に関する記述があることが言われており［井谷1994; 清水2005: 70］，さらにはイブン・スィーナー Ibn Sīnā（d. 429/1037）の『医学典範 *al-Qānūn fī al-Ṭibb*』といった医学書にも少年との性交は激しく動いて疲れるために有害であるとの記述がある［*Qānūn* 2: 535, 549］。こうした様々な分野の書物に，断片的ながら同性間での性愛関係が登場していることから同性間性愛が当時の社会におけるセクシュアリティの中に当然の有り様として存在していたことが窺える。しかし，こうした同性間性愛を含むセクシュアリティの全体像について表すような史料は，その性質上希少であり，同時代のものとしてはジャーヒズの『ジャーリヤとグラームの美点の書』がほぼ唯一のものである。

（6） アッバース朝期の社会史を扱った最近の研究で同性間性愛に関連するものとしては，［Szombathy 2013］や［Shuraydi 2014］が挙げられよう

が，両者とも当該社会のセクシュアリティについて深く掘り下げたものではない。

（7）「真面目と冗談 al-jidd wa al-hazl」と呼ばれる技法は，一つのテーマに対して堅苦しい教訓的な言及と気晴らしになるような軽い言及とを適宜配置し，読者の関心を途絶えさせないための技法であり，アダブ作品の特徴の一つとされる。この技法とジャーヒズに関しては［濱田2006; 岡﨑2010］などを参照。ジャーヒズの小論の一つにはこの技法自体について扱った『真面目と冗談についての書簡 *Risāla fī al-Jidd wa al-Hazl*』がある［Pellat 1969: 207-216］。

（8）ジャーヒズが成立させたと言われるアダブ作品のジャンルの一つが，論争文学である。特にその中でも様々な二つの事物を比較考量しその優劣を競う形で書かれた「ムナーザラ munāẓara」と呼ばれる形式はジャーヒズを先駆けとすると言われる［Rosenthal 1997; 岡﨑2009］。*MJGh* についても，ジャーヒズ自身が以前に冬と夏の比較やヤギと羊の比較について書いたことと，今回もそれと同様の方法で「ルーティーたちと姦通者たちとの間で起こったことについて話したい」と書いている［*MJGh*: 95］ことから，ムナーザラ作品に位置付けられる。

（9）*MJGh* の序文の中でジャーヒズ自身も，知識には真面目なものから馬鹿げたものまで様々な種類があり，それら全てを学ぶことが重要であると述べている［*MJGh*: 91］。また，アブー・バクル Abū Bakr（d. 13/634）やアリー ʻAlī（d. 41/661）など多くの著名な人物たちも性的な言葉を用いたり性的な言動を行っていたという逸話を挿入したり，本当に卑猥な言葉が用いられるべきでないなら，そうした言葉はアラビア語彙として残っていないはずだという理屈によって，性的な話題に関する知識であっても避けられるべきではないと主張する［*MJGh*: 91-95］。

（10）ジャーリヤとグラームについて論争する形の作品は，*MJGh* 以降もいくつか模倣され，同様の手法で書かれた。その中でも最も有名な物はカーティブ al-Kātib（d.518/1124）による『楽しみの集成 *Jawāmiʻ al-Ladhdha*』中の一節である［Rosenthal 1997］。また，かなり後世になって挿入されたものと考えられるが『千夜一夜物語』中にもジャーリヤとグラームとの優劣に対する議論が行われる話が採用されており［前嶋1979］，この形

の作品が一定のジャンルとして確立されていたことを窺わせる。さらに言うと，「男女優越論」という分野は日本でも1640年前後に書かれた『田夫物語』を先駆けとして発展しており，また西洋においても同様のジャンルは多く見られる［リューブ2014: 128］。

(11) 前述のようにジャーヒズ自身，この作品の目的として「ルーティーたちと姦通者たちとの間で起こったことについて話したい」［*MJGh*: 95］と書いていることからも，これらの人物類型の重要性がわかる。また，zinā'（zanā）は一般的には「姦通者」と訳されるが，この記述からもわかるように，*MJGh* においては「ジャーリヤ支持者」とほぼ同義で用いられている。同様に「ルーティー」という語は「グラーム支持者」とほぼ同義で用いられる。

(12) 「ジャーリヤ」の意味については［波戸2007］が特に詳しい。これによると「ジャーリヤ」の語はアッバース朝から時代を経ると「自由人の若い女性」の意味から「女奴隷」の意味で用いられることが多くなる。

(13) *MJGh* では他に「女性」や「少女奴隷」「奴隷女」「フーリー」などの語がジャーリヤと言い換え可能な形で現れる。ここで「女性」と訳した語とその登場箇所は mar'a［*MJGh*: 97, 102］，imra'a［*MJGh*: 132, 133, 134, 135］，nisā'［*MJGh*: 97, 99, 101, 113, 117, 124, 129, 131］，awānis［*MJGh*: 98］，unthā［*MJGh*: 112］。「少女奴隷」と訳した語とその登場箇所は waṣīfa［*MJGh*: 95, 97, 104］，waṣā'if［*MJGh*: 126, 133］。「奴隷女」と訳した語とその登場箇所は qayna［*MJGh*: 128］，mamlūka［*MJGh*: 131］。「フーリー」と訳した語とその登場箇所は ḥūr［*MJGh*: 96］。

(14) これに当てはまる「女性」と訳した語とその登場箇所は nisā'［*MJGh*: 123, 124, 127］，imra'a［*MJGh*: 123, 127］。nisā' や imra'a という表現は，広く一般的に身体的性としての女性を指し示す語でもあり，これらの事例を個別に見ても，ただ女性全般を指す際の表現であったり，逸話の伝承者として登場する場面での表現であったりと，そもそも議論の対象とならない人物を指している表現がこれにあたる。例としては「ある女性 imra'a がもう一人の者に向かってこういうのを聞いた」［*MJGh*: 127］といった記述が挙げられる。

(15) *MJGh* で「女性器」を示す語は ḥirr で表されることが多いが，［*MJGh*:

135］では恥丘 shufr と大陰唇 rakab という語で女性器の美点を述べている。当該箇所は結婚した男性がなぜその女性を結婚相手に選んだのかと尋ねられた返答において現れる。訳は以下。「彼女の大陰唇 rakab はまるで月の暈のようであり，彼女の恥丘 shufr は二つに折ったロバの男性器 ayr のようであった［からである］」［*MJGh*: 135］。

（16）　*MJGh* では「少年」や「髭のない若者」「奴隷」「若男」「若者」などがグラームと言い換え可能な形で現れる。ここで「少年」と訳した語とその登場箇所は wildān［*MJGh*: 96］。「髭のない若者」と訳した語とその登場箇所は amrad［*MJGh*: 98, 112］，murd［*MJGh*: 98, 111］。「奴隷」と訳した語とその登場箇所は waṣīf［*MJGh*: 104］。「若男」と訳した語とその登場箇所は fatā’［*MJGh*: 110, 130］。「若者」と訳した語とその登場箇所は ṣibā’［*MJGh*: 117］。

（17）　男性器の形と肛門の形が，どちらも正面から見ると円形に見えるということを示している。後の「戦斧の形」も，斧を正面から見た形が正面から見た女性器（陰唇）の形に見えるということだと考えて，この記述は理解すべきであろう。

（18）　*MJGh* で去勢者がジャーリヤやグラームとは異なる人物類型として語られていることは「あなた〔グラーム支持者〕は，去勢者について述べることを我々〔ジャーリヤ支持者〕に強いた。我々はジャーリヤとグラームについて語ることに限っているため，本書においてその意味はないにもかかわらず」［*MJGh*: 123］という記述からも明らかである。

（19）　*MJGh* におけるハーディム・ハスィーという語については［Ayalon 1985］が詳しい。アヤロンは *MJGh* の記述を根拠として，イスラーム初期史料におけるハーディムという語のほとんどが「去勢者」の意味で用いられていると論じる。しかし清水はこの論考を高く評価しつつも，ハーディムという語の全てが「去勢者」を指していたとは言えないと主張している［清水2005: 71-79］。

（20）　イスラーム世界において同性間での恋愛・性愛関係は，基本的にハラームである。この根拠としてはクルアーンの預言者ルート Lūṭ（旧約聖書での預言者ロト）の伝承と「同性愛者」への罰についての記述が挙げられる（クルアーン7: 80-84，11: 69-83，15: 51-77，21: 71-75，25: 40,

26: 159-175，27: 54-58，29: 28-35，37: 133-138，54: 32-40）［Pellat et al. 1986］。

(21)　ヒシャーム・ブン・アブドゥルマリク Hishām b. ‘Abd al-Malik（d.125/743）はウマイヤ朝第10代カリフ（在位106/724-125/743）。*MJGh* における他の箇所では，女性との性交の際に彼の男性器の大きさが強調された記述がある［*MJGh*: 133］。

(22)　イスハーク・ブン・イブラーヒーム・マウスィリー Isḥāq b. Ibrāhīm al-Mawṣilī（d. 235/850）はアッバース朝宮廷に歌手・ナディームとして仕えた人物。『修道院の書 *Kitāb al-Diyārāt*』においては，ムタワッキル al-Mutawakkil（在位233/847-247/861）のナディームであるアブー・アブドゥッラー Abū ‘Abd Allāh が，ムタワッキルの寵臣であるファトフ・ブン・ハーカーン al-Fatḥ b. Khāqān とグラームとの恋愛を仲介した罪で罰せられた際に，アブー・アブドゥッラーを慰め，彼の宮廷への復帰を取りなしている［*Diyārāt*: 7-9］。

(23)　堀内によると，ハマザーニーのマカーマートなどに「外見・見た目は美人だが，出自または中身は卑しい女性」を意味する表現として「糞で緑の女 khadrā’ dimnah」というものがある。これは，緑草が一面に広がっている一角は見た目には綺麗でも，その下（土壌）は栄養豊富な糞尿の溜場であるためだということから，上辺は綺麗でも一皮むけば汚らしいという故事によるものであると言われる［堀内2015: 609-610］。ここでの「緑のサッラーマ Sallāma al-Khaḍrā’」という表現も，サッラーマが卑しい者であることを示す呼び名であると捉えると，内容とも一致する。

(24)　例えば，古代ギリシアではセクシュアリティの場において能動／受動の役割が名誉の観念と結びつき重要な意味を持ったという点でアッバース朝期のセクシュアリティとの共通性が見られるが，少年との恋愛が法や生活の前提に存在していたという根本的な相違点がある［ドーヴァー1984: 43-49, 129-140］。また，前近代日本でも男色文化においては同様に能動／受動の役割が重要な意味を持ったが，社会的身分ではなく年齢によって型どおりに役割が決まるために，受動の側が不名誉とされることはなかったとされる［リューブ2014: 244］。

（九州大学大学院人文科学府修士課程）

of law and order by armed vigilance committees (*tuanfang* 團防). Consequently, although reforms in legal institutions were carried out from the top down by the central government, public works at the local level still depended as before on local self-government. In the case of Jiangnan in 1914-15, the importance of the role played by the prefectural gentry in basic echelons of society at the local level continued to be recognized, while the authorities—the prefectural admin-istrators, who had taken on the role of the prefectural administrators in Dynastic China (*zhouxian guan* 州縣官)—were crucial in the affairs of local governance.

That being said, after the suspension of local autonomy, the Jiangnan Water Control Bureau that was established in Suzhou (蘇州) brought together the prefectural gentry. Therefore, although the importance of provincial level administrative offices did increase from that time on, the prefectural gentry still continued to play a very important role in local governance.

Sexuality and Male-Male Sexual Relationships in the ʻAbbāsid Period: Through an Analysis of al-Jāḥiẓ's *Kitāb Mufākhara al-Jawārī wa al-Ghilmān*

Tsuji Daichi

While it is commonly known that sexual and love relations between men in pre-modern society, including that of the ʻAbbāsid Period, were widespread, most of the historical research to date has regarded such relations as synonymous with modern concepts of "homosexuality." In addition, historians tend to be of the opinion that what may be called the "essentialist" concept of "Islamic homosexuality" has been embraced consistently regardless of time or place, when trying to understand male-male sexual relationships of various places and different periods.

In recent years more and more research is being done that reexamines these conventional views. In particular, the research on the Ottoman Period has begun to relocate male-male sexual relationships within the context of sexuality as a whole. Unfortunately, the ʻAbbāsid period has yet to be so reconsidered, mainly due to a paucity of historical sources regarding sexuality

during that time.

Given such circumstances, the present article is an attempt to show one facet of sexuality at the time, through a consideration of male-male sexual relationships in the ‘Abbāsid period. For this purpose, the author conducts an analysis of the discourse presented in the al-Jāḥiẓ’s *Kitāb Mufākhara al-Jawārī wa al-Ghilmān* (The Book of the Boasting Match between Girls and Boys) which is almost the only historical material written dealing explicitly with the subject of sexuality.

The analysis shows that there was a distinction between “adult males” and “non adult-males,” including not only females but boys, adolescents and so on, with respect to sexual relationships. Moreover, this distinction seems to correspond to a distinction between active and passive roles in sexual intercourse. The author concludes that sexual relationships at the time were based not on modern binary sexual categories of male and female, but rather on a different category fluctuating between “adult males” and “non adult-males.”